

今週の為替相場見通し(2021年5月24日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		108.58 ~ 109.50	108.96	108.00 ~ 110.00
ユーロ	(ドル)		1.2127 ~ 1.2245	1.2182	1.2100 ~ 1.2300
(1ユーロ=)	(円)		132.54 ~ 133.43	132.72	132.00 ~ 133.50
英ポンド	(ドル)		1.4078 ~ 1.4233	1.4158	1.4000 ~ 1.4250
(1英ポンド=)	(円)	*	153.54 ~ 154.84	154.17	152.50 ~ 155.00
豪ドル	(ドル)		0.7711 ~ 0.7813	0.7730	0.7610 ~ 0.7850
(1豪ドル=)	(円)	*	84.04 ~ 85.15	84.22	83.20 ~ 85.30

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 天雲 遊也

(1)今週の予想レンジ: 108.00 ~ 110.00 円

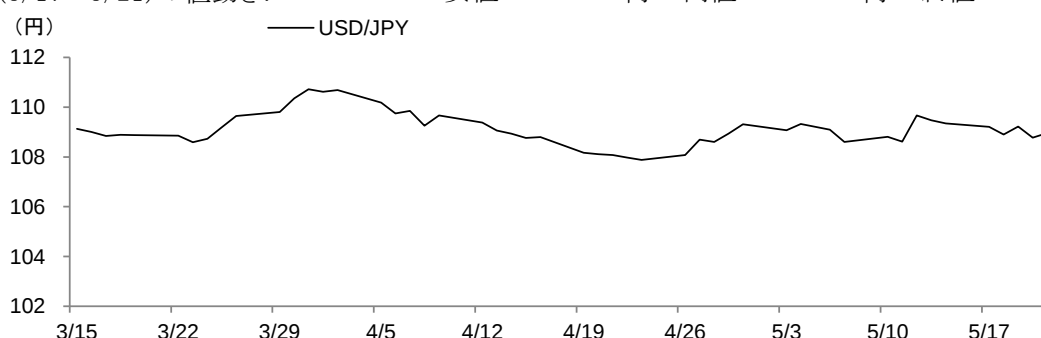
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円は上値の重い展開となった。週初17日、109.40円近辺でオープンしたドル/円は、仲値にかけて一時週高値の109.50円まで上昇するも、日経平均株価の下落や先週末からの米国経済指標の弱い内容を受けてドル売り優勢となり、109.08円まで下落。その後は新規材料に欠ける中、109円台前半で方向感なく推移した。18日は、米金利の伸び悩みからじりじりと下落し、欧州時間序盤にリスクオンのドル売りが活発化し109円を割り込む。その後も、米4月住宅着工件数が弱含む結果に108円台後半での上値の重い推移となった。19日は、堅調な米金利を横目にじりじりと上昇し109円台を回復したが、暗号資産の急落により株安・金利低下の流れが強まると一時週安値108.58円まで下落。その後公表されたFOMC議事要旨で量的緩和縮小の必要性について言及されたことが材料視され、109円台前半まで値を戻した。20日は、米金利上昇が一服し、じりじりと下落する展開に。海外時間に発表された米4月フィラデルフィア連銀景況指数が予想を下回る結果に、108円台後半まで下落。21日は、米5月製造業・サービス部門PMI、米4月中古住宅販売件数の強弱まちまちの結果に上値重く推移し108.96円で越週した。

今週のドル/円は堅調推移を予想する。米4月CPIの予想を上回る結果にインフレ加速懸念は依然高まっている。係る中、株式市場は19日にテクノロジー銘柄を中心に下げ幅を強める等、不安定な動きとなっており、米金利は米4月雇用統計後の低水準(1.46%)と比較すると堅調推移となっている。インフレ懸念が燃る中、リスク許容度が低下しておりドルが買い戻されやすい展開となると考えている。また、FOMC議事要旨で言及されたタカ派寄りの内容に早期テーパリング観測期待も高まっており、米金利やドル/円のサポート材料となるだろう。今週は比較的材料が少ないが、米4月PCEコアデフレーターや5月ミシガン大学消費者マインド等で予想を上回る結果となったり、Fed高官の発言で早期テーパリングの必要性に関する議論が活発に展開されると、ドル/円は小確りとした値動きになることを基本シナリオとしたい。

(3)先週末までの相場の推移

先週(5/17~5/21)の値動き: 安値 108.58 円 高値 109.50 円 終値 108.96 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部 為替営業第二チーム 玉井 美季子

(1) 今週の予想レンジ: 1.2100 ~ 1.2300 132.00 ~ 133.50 円

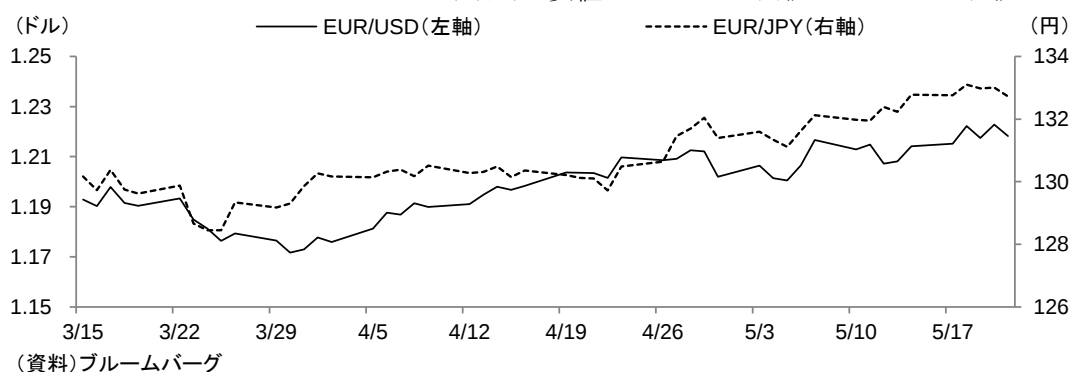
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は上昇する展開となった。週初17日、1.21台半ばでオープンしたユーロ/ドルは、海外市場でドル売りが優勢となり一時1.21台後半まで上昇。その後は、新規材料に欠ける中、利益確定の売りなど調整中心の動きが継続し、1.21台前半から半ばでの小動きとなった。18日は、米金利の低下を受けてドルが売られる展開となり、1.22台前半まで上昇した。その後は随所で利食いのユーロ売りが入ったが、ユーロ/ドルは底堅い値動きが継続した。19日も、米金利低下によるドル売りが続くと一時週高値の1.2245まで上昇したが、その後はFOMC議事要旨の内容を受けてドルが買い戻され、ユーロ/ドルは1.21台半ばまで下落した。20日は、前日後半の流れが一巡してじりじりと値を上げ、後半も軟調な米経済指標を背景に1.22台前半まで続伸した。21日はラガルドECB総裁が利回り上昇について注意深く監視しているとの発言で下落。さらに好調な米指標を受けたドル買いもあり1.2161まで下落し、1.21台後半で越週した。ユーロ/円は上昇後下落。週初17日132円台後半でオープンしたユーロ/円は、ユーロ/ドルの堅調推移に連れて上昇。19日には週高値となる133.43円をつけた。その後暗号資産やコモディティ資産の下落を受けたリスクオフのドル円の下落とFOMC議事要旨を受けたユーロ/ドルの下落を受けユーロ/円は132円台半ばまで下落。その後ドル円が戻したため133円台を回復する場面もあったが21日はユーロ/ドルの下落を受けて週安値となる132.54円まで下落し132円台後半で越週した。

今週のユーロは堅調推移を予想する。ユーロ圏では新型コロナウイルスの感染拡大が落ち着き、徐々に経済活動が再開している。21日に発表された5月PMIでも総じて前月からの改善が確認された。懸念されたワクチン接種も進んでおり、ユーロを支えている。米国でもワクチン接種とともに新型コロナウイルスの新規感染者は減少してきているが、4月の米雇用統計が予想を大きく下振れたほか、強いCPIの結果を受けてもFRBがハト派な姿勢を崩していないことから米金利は上昇しづらい状況にある。今週は28日(金)にユーロ圏5月消費者信頼感指数の確報値や米4月PCEデフレーターを発表を控えているが、各中銀の姿勢を変えるような材料にはなると思えず、ユーロ/ドルはFRBのハト派姿勢を背景に堅調推移を予想する。

(3) 先週までの相場の推移

先週(5/17~5/21)の値動き: (対ドル) 安値 1.2127 高値 1.2245 終値 1.2182
(対円) 安値 132.54 高値 133.43 終値 132.72



3. 英ポンド

欧州資金部 本多 秀俊

(1) 今週の予想レンジ: 1.4000 ~ 1.4250 152.50 ~ 155.00 円

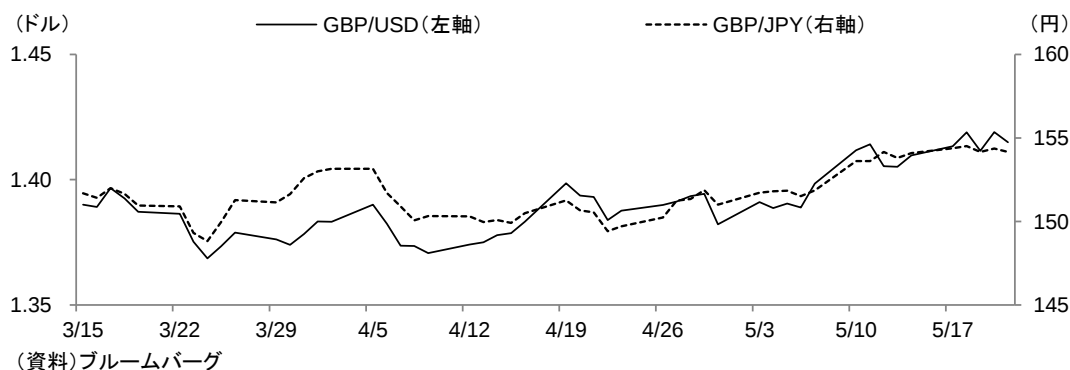
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、堅調気味の横這い。対ドルでは、年初来高値の更新はならなかったものの、一段水準を切り上げ、対円では、39か月ぶりの高値を更新したものの、週を振り返っての上げ幅は僅かにとどまった。英政府（イングランドなど）は、17日、コロナ関連の行動制限を一段と緩和、パブやレストランなどの屋内営業の他、映画館、劇場などの営業も再開された。こうした緩和措置が予定通り実行に移されたことが、英経済回復への順調な軌跡を示し、或いは週明け直後のポンド押し上げ要因になったのかもしれない。また、18日に英雇用統計（英1～3月平均賃金など）、19日に英4月CPIの発表を控え、米当該指標の大幅上振れなどから、英インフレ圧力の高まりが確認される可能性（英中銀の金融引き締め要因）が警戒されたことも、ポンドの堅調な滑り出しを演出する要因になったものと考えられた。ポンド/円は、18日、39か月ぶりの高値を更新する154.84円まで上伸した。19日には、暗号通貨の暴落を受けたリスク回避の円急騰（ポンド/円も急落）や米連銀4月公開市場委員会の議事録が、同委員会が資産購入策（量的緩和）縮小について議論していた事実を明らかにしたことで広がったドル急騰（ポンド/ドルの下押し）など英以外の要因による上下動が散見されたが、週末を前に、ポンドは再び独自の要因で水準を切り上げた。英中銀金融政策委員会のカンリフ委員が、20日、英住宅市況の活況に言及したことや、21日に発表された英4月小売売上高が市場予想を明確に上振れたことなどがポンド押し上げ要因と読まれ、21日、ポンドは対ドルで1.4233と、この間の高値まで上昇。その後週引けに掛けて失速、小幅水準を引き下げて週の取引を終えた。

今週の英ポンド相場は、対ドルで軟調、対円で横這いを予想する。過去3ヵ月余りのポンドの値動きを振り返ると、対ドル、対円では堅調気味の推移が続いているが、対ユーロでは横這いから、軟調気味に推移してきた。アイルランド/北アイルランド国境を巡る問題や、英海域の漁業権を巡る問題など、英のEU離脱後顕在化してきた諸処の問題が、英、EUに共通する一方、ワクチン接種の進捗を踏まえた、先行き景気見通し、金融政策動向などを比較すると、英国とユーロ圏には差異こそ目立つものの、共通項は少ない。この2通貨が均衡を保っているということは、対ドル、対円でのポンド堅調は、ドル側の要因や円側の要因によるものである可能性の方が高いのではなかろうか。円安の要因が、ワクチン接種の遅れや、金融引き締めの遅れ（が見込まれること）などに容易に求められる一方、足下ドル軟調の要因は定かでない。年初来のドル反発の調整安を指摘することはできるが、主要通貨市場の趨勢は、引き続きドル堅調にあるのではなかろうか。2020年央～後半のドル安は、超低金利時代の定着＝金利差のない時代の長期化＝従来金利が乗っていた通貨（ドル）の下落という思惑が背景にあったはずだが、多くの国でワクチン接種が進み、今や、インフレが一過性か、定着するかという判断が市場の主要テーマになりつつある環境で、足下市場は、未だ昨年のドル安からの調整（ドル高）局面にあるはずと考えるからだ。足下主要通貨市場は、単月の米経済指標や、米連銀首脳などの発言（上述米連銀公開市場委員会議事録なども含む）に右往左往させられているが、仮に、中期的な方向感がドル高にあるのだとしたら、目先の相場を見通す場合の軸足もドル反発方向に置くべきではないかと思われる。英経済指標は、今週、25日（火）に英4月財政収支の発表が予定されるが、市場の関心が高いとは言えない。

(3) 先週末までの相場の推移

先週（5/17～5/21）の値動き: (対ドル) 安値 1.4078 高値 1.4233 終値 1.4158
(対円) 安値 153.54 高値 154.84 終値 154.17



4. 豪ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 甲斐 貴之

(1) 今週の予想レンジ: 0.7610 ~ 0.7850 83.20 ~ 85.30 円

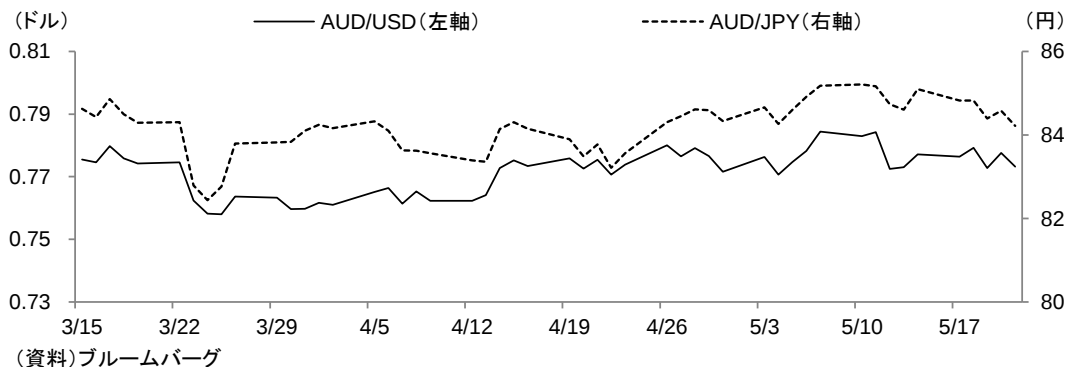
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルはRBAミニッツ発表前にテーパリング協議期待から0.78手前まで上昇した。週中ではFOMC議事要旨が公表され、一部メンバーから資産購入ペース縮小の開始について議論がされていたことが、サプライズとなり、0.7710まで一旦ディップした。週末にかけては、良好な豪雇用統計結果や原油価格の上昇などを受け、0.778台まで上昇する局面があったが、引けにかけては急速に上げ幅を縮小し、0.772台まで下落して、クローズした。18日はRBAミニッツ発表前にテーパリングについての協議期待を背景に上昇し、0.7790越え。しかし発表された議事録要旨で「利上げの条件は早くても2024年まで整わない公算」「3年国債の利回り目標0.1%からの変更は正当化されない」とあり、目標に向け進展助けるなら債券購入を継続すると、RBAが慎重姿勢を崩さなかったことから豪ドルはやや頭をもたげた。RBAは完全雇用への到達が金融政策の最優先目標と強調した。次回7月6日開催予定のRBA会合では買い入れ対象の3年国債を現行の2024年4月から同年11月に移行するかどうか決定される。この結果で初回利上げ時期がいつになるかを占うことになる。ロンドン時間では米株先物や欧州株に加え原油先物も上昇し、リスク選好の動きから豪ドルが支えられ、0.78台へのせ、高値は0.7813まで。NY時間は米債利回りが上昇したものの、大きくドル買いとはならず、豪ドルは支えられた。19日は前日のNYの流れを引き継ぎ0.77後半で推移していたものの、ロンドン時間で米10年債が上昇し、欧州株や株先、原油が相次いで下落するとややリスクオフムードとなり、ドル買いに反転。豪ドルは0.77前半へと重く推移した。但しNY入りで米株や原油に売りが強まるとドル売りも交錯した。NY午後に公表されたFOMC議事要旨ではインフレは一過性とみているとあり、FRBの慎重姿勢に変化は見られなかったが、今後の会合における資産購入ペース縮小の議論開始予測が一部のFOMCメンバーから出ていたことが明らかとなり、ややサプライズとなり一時週安値の0.7711まで下落した。20日はNZの堅調さと豪雇用統計結果が豪ドルを押し上げ0.77後半まで上昇。NZ政府予算2021年7月～翌年6月の予算が発表され、ロバートソン財務相が「労働市場の見通し改善と経済活動の力強さから新型コロナによる長期的な影響が従来の想定程大きくない」と述べ、NZドルが堅調に推移すると豪ドルも支えられた。また豪4月雇用統計では雇用者数変化が-30.6kとなったものの、中身を見るとパートタイムが-64.4kでフルタイムは堅調に+33.8kとなっていた。また、労働参加率は前回の66.3%から66.0%に減少したものの失業率は3月の給与補助プログラム終了後も改善していた。この結果を受け、豪ドルは一旦0.7735近辺から昨日の今週安値近辺まで下落したものの、その後は買いが相次ぎ、1日を通してゆっくりと0.77後半まで上昇を続けた。21日は0.777台から0.774台まで下落するも、原油価格の上昇を背景に豪ドルも0.778台まで上昇。その後、急速に上げ幅を縮小し、0.772台まで下落し、0.723台でクローズした。豪ドル/円は84.2台でクローズした。

今週は26日にRBNZ金融政策決定が予定される。前回同様、金融政策等の据え置きが予想されるものの、タカ派傾斜の機運が見られるかには留意したい。先日のRBAでは金融政策運営とYCCの誘導目標を据え置いたものの、YCCのターゲット銘柄の移行検討、9月完了予定の債券購入プログラムの継続に関する検討を7月の決定会合に据え置いていることもあり、隣国の金融政策の動向には注目が集まるところ。それ以外には比較的材料がない中で、米経済指標やFed高官の発言を受けて、足元、前倒し期待が剥落していたテーパリング時期に対して、再び期待値が高まるかもしれない点についても留意が必要と思われる。

(3) 先週までの相場の推移

先週(5/17～5/21)の値動き: (対ドル) 安値 0.7711 高値 0.7813 終値 0.7730
(対円) 安値 84.04 高値 85.15 終値 84.22



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償のみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。